

## 第1回

### 教室を安心して「心地いい」環境に 「四つの窓」「白くまくん」



千葉県君津市立八重原小学校教諭

**江越 喜代竹**

えごし きよたけ 「生きるを楽しむ」をテーマに掲げる小学校教師。ギターをかき鳴らし、「ゆるやかで、あたたかいクラス」を目指しています。

四月。子どもにとっても、教師にとっても、期待と不安の入り混じった季節ではないでしょうか。一年の始まり。新しい仲間と「一年間過ごしていこう！」と安心感を持ってスタートしてほしい。そんな願いを持ちながら、新しいクラスに立っています。

**教師の役割は「場をつくる」こと**

学級は、子どもたちにとって「社会生活の原体験」となる場だと思います。

この子どもたちが大人になったとき、会社や地域で、どんな場が「心地いい」と感じるのか。「心地いい」と感じる原点は、「学校」や「学級」にある。誰もが「心地いい」と感じられる場が社会に増えれば、安心して暮らせる社会になると、僕は思います。

子どもたちが安心して自分を、自分の力を発揮できる場をつくる。教師の役割は、そんな「場づくり」に尽きると思うのです。

「アイス」の根本は  
「受容懸念」の解消

「アイスブレイク」とは、「メンバーが緊張して固まっている空気感や雰囲気や和らげる」活動のことを指します。四月の学級のような場では、お互いをよく知らないことで緊張状態が生まれてしまいます。

心理学者のJ・R・ギブは「人間は、自分自身および他人をよりよく受容できるようになることを通して成長することを学ぶ」と提唱しました。また、生活の中にある防衛的風土を土台とした「四つの懸念」が成長の障害となっていると考えたそうです。その一つに、「受容懸念」というものがあります。「ここにいる人はどんな人なのだろう、私はこの人たちに受け入れられるのだろうか」という怖さです。この「受容懸念」が解消されると、メンバー間の信頼関係が築かれていきます。つまり、自分自身や他人をよりよく受容できるようになり、「成長」につながるのです。

「アイスブレイク」は、この「受容懸念」を解消する活動とも言えます。

### アクティビティ 四つの窓

教室を「心地いい場」にするにはまず、「お互いを知る」ところから。だけど「いきなり話すのはちよつと…」という子も多いはず。特に、初めての人同士が話しやすくなるための、ちよつとした「きっかけづくり」を大事にしたいと思います。僕はよく、白紙一枚あればできるこの活動を取り入れています。

- ① A4サイズの紙を配付します。見本を見せながら、縦と横に一回ずつ折るように入ります。
- ② 四つに分割したところに、左上からそれぞれ「名前」「呼ばれたい名前」「今、どんな気持ちか」「どんな一年間にしたいか」を個人で記入します(図1)。教師のモデルを見せておくと、書きやすくなります。時間は一〜二分程度。「あとでこの紙を見せながら自己紹介しま

図1 アクティビティ「四つの窓」の例

名 前	呼ばれたい名前
今、どんな気持ちか	どんな1年にしたいか

す」と伝えておくことで、相手に見えるやすい文字の大きさ、濃さなどを意識させることができます。

③ 書いた紙を見せながら、全員に自己紹介します。事前に話したい内容を紙に書いておくことで、話すのが苦手な子どもでも安心して取り組めます。人数や時間の都合によって、数人のグループで紹介し合ってもOKです。

\*五分程度時間をとり、教室内を自由に歩き回って、初めて会う人、初めて同

じクラスになる人五人と自己紹介する、というアレンジもできます。その際、紙の空いたところや裏に、自己紹介を聞いてくれた人の「サイン」をもらいましょう。こどもちよつとした会話のきっかけが生まれます。

### 「自分になる」を支援する

いまだに何度も読み返す本に、『のびやかに自分になる』(伊勢達郎著、TOEC幼児フリースクール、二〇〇〇年)という本があります。徳島県にあるTOECというフリースクール代表の方が書かれた本です。ここに書かれた言葉を、折に触れて読み返しています。以下、本の中から一番好きな箇所を紹介します。

「子どものためを思って、ほめること、しかること、そのことが、かえって自己主導的に生きようとする子どもの生命に影を落とすことがある。大人は一度、自分の価値観で子どもを支配しようとする思惑や、子どもを教え導くという教育観を捨てなければならな

い。なぜなら、子どもは私たち大人の  
思惑、価値観を越えて成長していく存  
在だからである。善悪を交えず、あり  
のままの子どもを受け止めているだろ  
うか。子どもの『今』を忘れて、『明  
日』にとらわれてしまいか、大切なこ  
とは目の前の子どもの等身大の姿を、  
ただ認めていくことだろう。『認める』  
ということとは、『ほめる』ということ  
は明らかにちがう行為であり、『認める  
教育』で人はのびやかに自分になる…  
(中略)：子どもは、自分を認めてくれ  
る大人を鏡とし、自らを整え、建設的  
な方向へ進む力を内在しているのだ。」  
この文章を読み返すたびに、子どもた  
ちと自分とのかかわり方を見つめ直し  
ています。

### 「ほめる」「叱る」の窮屈さ

学校では、子どもを「ほめる」ことで  
よさを伸ばす、「叱る」ことで子どもたち  
を導く、という考えがよいとされていま  
す。ただ、その「ほめる」や「叱る」が

子どもたちを教師の、大人の都合のいい  
ように「型にはめていく」ように感じて  
しまうときもあるのです。

言葉としては「ほめて」いるし、子ど  
もも「うれしそう」にはしている。けれ  
ど「届いていない」感じがする。「ほめ  
る」行為、「叱る」行為は、「ありのまま」  
ではない「こうあるべき」という価値観  
で評価しているのではないか。ほめられ  
ても、しかられても、子どもたちは「こ  
うあるべき」に押し込められているの  
はないか…。

「こうあるべき」という価値観を手放  
し、「ありのまま」を認めることで、子ど  
もたちは本当に安心し、自らの力で伸び  
ていけるのだと思います。子どもたちの  
「ありのまま」を認められているかな…、  
そう思いながら、教壇に立つ毎日です。

### 白くまくん

「認める」と一口に言っても、実際に言  
葉や態度、行動で表すことはとても難し  
いです。「認める」ことを子どもたちに伝

える第一歩として、「一人一人違っていい」というメッセージを伝えてみてはどうでしょうか。これは学生時代に大学の先輩から教わったアクティビティですが、「一人一人が違っていい」ということを伝えるのに最適だと思います。

用意するのは、大きめのサイコロ二つ。量販店や一〇〇円ショップのパーティーグッズコーナーなどで売っています。

①「このサイコロは最新のGPS機能付きです。サイコロを振るだけで、北極の白くまがエサを食べているかどうかわかるのです」と、語ります。

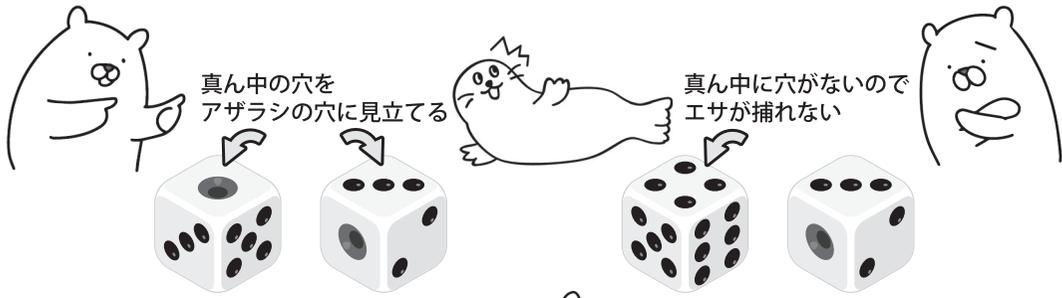
②「白くまのエサはアザラシです。北極に住む白くまは、アザラシが呼吸のために氷の穴から顔を出した瞬間を狙って、狩りをするのです」と語り、二つ同時にサイコロを振ります。

③「1」は、「穴はあるけど、白くまはいません」。

「2」は、「二頭、エサが捕れなかったようです」。

「3」は、「今、二頭の白くまがエサを捕りました」。

図2 アクティビティ「白くまくん」の法則



この場合は、「今、アザラシが顔を出す穴が2つ開いています。1つの穴では、2頭の白くまがエサを捕りました。だけど、もう1つの穴には白くまはいません」ということになります。



この場合は、「6頭の白くまがいて、エサにありつけるのは2頭です。残りの4頭はエサが捕れませんでした」ということになります。

「4」は、「四頭、エサが捕れなかったようです」。  
 「5」は、「今、四頭の白くまがエサを捕りました」。  
 「6」は、「六頭、エサが捕れなかったようです」。  
 これを二つのサイコロの出た目の組み合わせで解説します。例えば出た目が「1」と「3」なら、「今、アザラシが顔を出す穴が二つ開いています。一つの穴では、二頭の白くまがエサを捕りました。だけど、もう一つの穴には白くまはいません」ということになります。

④ なかなか法則に気づけない場合は、「あの法則が隠されているよ」と声をかけていきます。あわせて、「今回は自分で法則を発見してほしいから、法則がわかっても誰にも教えないでください」と声をかけておきます。

何度かサイコロを振り続けると、あの法則に気づく子が出てきます。気がついた子は、「あー」などと声を上げることが多いです。気づかない子はいつ

までも気づかない。時折、「気づいた人は静かに手を挙げてください」などと問いかけて、確認してもいいでしょう。気づかない子がいても、それでいいんです。クラスの三分の一から四分の一くらいの子が気づいたところでアクティビティを終了します。

法則：サイコロの中央、「1」の目がある場所を「アザラシの穴」に見立てています。奇数のときは中心に印があるので「穴がある」状態、偶数のときは中心に印がないので、「穴はない」○頭の白くまがエサを捕れない」となります(図2)。

⑤ 最後に、「一人一人、気づくタイミング、学びが起こるタイミングは違うんです。同じことをやっても気づく人、気づかない人がいるように、一人一人の学び方、学ぶタイミングは違います。だけど、それでいいんだよ。一人一人が違うからこそ、お互いに助け合って学んでいこう」などと声をかけます。